

## 過渡期の經濟法則の考察(三)

山 本 二 三 丸

### 八

さて、われわれは、スターリンの著作、『ソ連邦における社会主義的經濟的諸問題』のうちの「価値法則」にかんする論説をとりあげて、検討を加えることにしよう。「価値法則」にかんする論説がまとまった形で示されているのは、その中の「三 社会主義のもとでの価値法則の問題」においてであるが、その他においても随所に同様の趣旨にもとづく主張がのべられている。われわれはまず、この「三」の内容について丹念にみていくことにしよう。

前稿でみたように、スターリンはその「三」に先きだつ「二」で、「社会主義のもとでの商品生産」の「存在理由」を説明しているのであるが、この「二」の説明を「根拠」にして、スターリンは、その「三」の冒頭で、「わが国に価値法則が存在しているか？」という質問にこたえて、ただちに、

「そうだ、存在しており、そしてまた作用している。商品と商品生産とがあるところには、価値法則もないわけにはいかないのである。」

と述べて、以下「価値法則」についての説明を展開している。

そこで、われわれは、なによりもまず、「価値法則」に坎するスターリンの説明の主要部分をつぎにかけて、これについて吟味することにしよう (イ、ロ、ハ)………は山本がつけたもの、………は中略部分を示す。

「(イ)価値法則の作用する範囲は、わが国では、まず第一に商品流通に、売買を通じての商品の交換に、主として個人的消費のための商品の交換に、およんでいる。ここでは、つまりこの領域では、価値法則は、もちろん、ある限界内で、規制者の役割を保持している。

(ロ)しかし、価値法則の作用は商品流通の範囲にかざられているのではない。その作用は生産におよんでいる。たしかに、価値法則は、わが社会主義的生産においては規制的意義をもっていない。しかし、それはやはり生産に影響をあたえているのであって、生産を指導するさいにはこのことを考慮しないわけにはいかない。生産過程における労働力の支出をつぐなうために必要な消費物資が、わが国では、価値法則の作用をうける商品として生産され、そしてまた実現されているというところに問題がある。まさにここで、生産にたいする価値法則の影響がはたらくのである。

これと関連して、わが諸企業では、ホズラスチョートと収益性との問題、原価の問題、価格の問題、などといった諸問題が、緊要な意義をもっている。それゆえに、わが諸企業は、価値法則を考慮せずにはすまされないし、またすましてはならないのである。

これはよいことだろうか？ 悪いことではない。わが国の現在の諸条件のもとでは、これは実際のところ悪いこと

ではない。なぜなら、この事情は、生産の合理的運営という精神でわが経済活動家たちを教育し、そして彼らを訓練するからである。これは悪いことではない。なぜなら、この事情は、生産の規模を計算し、しかもそれを正確に計算し、同じくまた生産における現実の事柄を正確に考慮するように、そしてあてずっぽうにもちだした「概算資料」についてつまらないおしゃべりをしないようにと、わが経済活動家たちに教えるからである。………これは悪いことではない。なぜなら、この事情は、生産方法を系統的に改善し、生産原価を引下げ、経済計算を実施して、企業の収益性を確保することを、わが経済活動家たちに教えるからである。………

困ったことは、価値法則がわが国で生産に影響をあたえていることにあるのではない。困ったことは、わが経済活動家たちや計画作成者たちが、少数の例外をのぞけば、価値法則の作用をよく知っており、それを研究しておらず、計算の場合にそれを考慮することができないということにある。いまなおわが国では、価格政策の問題で混乱が支配しているが、この混乱は、実のところ、これによって説明されるのである。数多くの例の中から一つをあげてみよう。少しばかりまえ、棉花と穀物との価格の相互関係を、棉作に有利に調整し、棉作者に売り渡される穀物の価格を適正なものにして、国家に渡される棉花の価格を引上げることが決定された。このためにわが経済活動家と計画作成者は提案を出したが、その提案は、中央委員たちをびっくりさせずにはおかなかった。なぜなら、この提案によると、穀物一トンの価格は棉花一トンの価格とほぼ同じ額にされ、しかも穀物一トンの価格はパン一トンの価格にひとしくされていたからである。パン一トンの価格は、製粉や製パンに追加的な費用がかかっているから、穀物一トンの価格より高くなければならず、また棉花は一般に穀物よりもはるかに値段が高い（стоит намного дороже）ものであって、このことについてはまた棉花と穀物との国際価格も証明している、という中央委員たちの意見にたいし

では、提案の作成者たちは、なにひとつ筋道の通ったことを言えなかった。そのために中央委員会は、やむなくこの仕事を自分の手にとりあげて、穀物の価格を引下げ、棉花の価格を引上げることがよぎなくされた。……………

(イ)しかし、すべてこうしたことは、価値法則の作用が、わが国でも、資本主義のもとで同じように、自由な活動の舞台をもっているとか、価値法則がわが国で生産の規制者となっているとかいうことを意味するであろうか？ いや、そういうことを意味しない。実際には、価値法則の作用する範囲は、わが経済制度のもとでは、厳重に制限されており、枠にはめられている。すでに述べたように、商品生産の作用する範囲は、われわれの制度のもとでは、制限されており、枠にはめられている。価値法則の作用する範囲についても同じことをいわなければならない。疑いもなく、生産手段の私的所有の欠如と都市ならびに農村における生産手段の社会化とは、価値法則の作用する範囲と、価値法則が生産に影響をあたえる程度とを制限せずにはおかないのである。

(ロ) わが社会主義的生産がたえず急速に増進しているにもかかわらず、一方、資本主義のもとで広い作用範囲をもっているその同じ価値法則が、資本主義諸国における生産の増進のテンポが低いにもかかわらず、周期的な過剰生産恐慌に導いているという、その驚くべき事実は、まったくこうしたことによって説明される。

(ハ) 価値法則は、恒常的な法則であって、歴史的発展のすべての時期に必ずあるものだとか、価値法則は共産主義の第二段階の時期には交換関係の規制者としての力を失うとしても、それはその発展段階でも、種々異なった生産部門間の諸関係の規制者としての、生産諸部門間の労働配分の規制者としての、その力を保持するであろう、といわれている。

これはまったく正しくない。価値は、価値法則と同じように、商品生産の存在と結びついた歴史的範疇である。商品生産の消滅とともに、価値およびその諸形態も、価値法則も、消滅するであろう。

(c) 共産主義の第二段階では、生産物の生産に費やされた労働の量は、商品生産のもとのように、回り道をしてではなく、価値およびその諸形態を媒介としてではなく、そのまますぐに、直接に——生産物の生産に支出された時間の量によって——量られるであろう。労働の配分についていえば、生産部門間の労働配分は、価値法則によってではなく——価値法則はこの時期には力を失うであろう——、諸生産物にたいする社会の諸欲望の増進によって、規制されるだろう。それは、生産が社会の諸欲望によって規制され、社会の諸欲望の計算が計画機関にとって第一義的な意義をもつようになる社会であろう。

(d) わが現在の経済制度のもとでは、つまり共産主義の発展の第一段階では、価値法則が種々異なった生産部門間の労働配分の「比率」を規制しているかのようにいう主張もまた、まったく正しくない。

(e) これらの同志たちは、価値法則が生産の規制者となりうるのは、資本主義のもとだけであり、生産手段の私的所有があり、競争、生産の無政府性、過剰生産恐慌がある場合だけである、ということを忘れている。彼らは、価値法則の作用する範囲が、わが国では、生産手段の社会的所有の存在によって、国民経済の計画にしたがった発展の法則によって制限されており、したがってまた、この法則の諸要求の近似的な反映であるわが年度計画や五カ年計画によっても制限されている、ということを忘れているのである」(傍点—山本)。

みられるように、ここに引用した叙述のなかには、肝腎の「価値法則とはなにか」ということの説明は、ひとつも

見当らない。スターリンはおそらく、「価値法則」の内容は、改めて説明するまでもない自明のことと考えたのであろう。だが、その意味内容は決して自明どころではなく、きわめてむづかしいのである。そして、多くのひとが「価値法則」にあたえている意味内容は、そのほとんどが完全に見当ちがいのものであって、でたらの思いつきにすぎないのである。「価値法則とはなにか」ということについての直接・明確な答えはここには示されてはいないが、しかし、スターリンがその意味内容をどのようにとらえているかということをはわせるに足る叙述は十分に見出されるので、われわれはまず、スターリンがどのように解釈しているかを示している文章を拾いあげて、検討することにしよう。

まず最初に気がつくことは、スターリンが、「価値法則の作用する範囲」として、なによりも第一に「商品流通」、「商品の交換」、「商品の価格」をあげていることである。これは、どういうことを意味するものであろうか？ これは、スターリンが「価値法則」という言葉を、もっぱら「商品の交換価値」または「商品の価格」にかかわるものだと理解していることを意味する。だが、残念ながら、「価値法則」という文字の中にあるのは「価値」であって、「交換価値」ではない。「交換価値」と「価値」とは範疇的に異なること、「価値」は本質であって、「交換価値」はその必然的な現象形態にほかならないこと、したがって、現象形態は本質をそのままあらわすことができず、つねに本質と異なった形であらわれざるをえないこと、「交換価値」は現実につねに「価値」から離れて運動するものであること——こうしたことは、『資本論』第一巻第一章でマルクスが克明に論証していることであって、こうしたことが読みとれない者は、マルクスの『資本論』のページもわからないものといつてよい。それゆえ、「価値法則」という言葉について、なによりもまず「交換」や「交換価値」または「価格」をこれに結びつける者は、「価値

法則」の意味内容がはじめからわからないことを告白するものでしかない。

ところが、「価値法則」の深い意味がつかめないために、いきおいこれを「交換価値」または「価格」にそのまま直結して解釈するしか能のない俗物は、実際、掃いて捨てるほどいるのであって、彼らは、ひとりのこらず、「価値と価格（または交換価値）との一致」または「価値どおりの価格（または交換価値）」こそが「価値法則」の「貫徹」であって、「価値と価格との不一致」または「価値どおりでない価格」は「価値法則」の「阻害」または「攪乱」である、といった「主張」にかじりついているのである。そして、始末の悪いことに、これらの俗物は、右の「主張」が、理論的にみてももちろんのこと、論理的にみてもすら、救いようのないほどでたらめなものであるということに気がつくことすらできないのである。右の「主張」は、第一に、「価格」が「価値に一致するか、しないか」ということだけを問題にしている、価値はまったく——前提されたものとして——問題にしていない。つまり、この「主張」がとりあげているのは、「価格（または交換価値）の法則」であって、「価値法則」ではないのである。第二に、「経済法則」は、歴史的な生産関係に規定されてつねに貫徹するものであり、また、まさにつねに貫徹せざるをえないがゆえに「法則(Gesetz)」なのである。「貫徹」してみたり、「阻害」されてみたりするようなものは、そもそも「法則」の名に値しないのである。右の「主張」は、まさしく、それ自身、経済理論の中核である「法則」についての完全な没理解をさらけだしているものであって、こうした俗物が唱える「マルクス経済理論」なるものは、みな衛学的な空文句を並べただけのものだといってよいのである。第三に、これらの連中には、『資本論』第一卷第一章第一節のうちの金文字——「価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値」の意味がさっぱり読みとれないばかりか、マルクスがその第三章第一節「価値の尺度」のなかで「価格」について懇切丁寧に明記しているつぎの叙述

が、まったくその眼に映らないのである。

(26)

「商品の価値量は、社会的労働時間にたいするある必然的な、その商品の形成過程に内在する關係を表わしている。価値量が価格に転化されるとともに、この必然的な關係は、一商品とその外部にある貨幣商品との交換比率として現象する。だが、この比率においては、その商品の価値量が表現されうるとともに、また、あたえられた諸事情のもとでその商品が譲渡されうるより大きい価値またはより小さい価値も、表現されうる。だから、価格と価値量との量的不一致の可能性、または価値量からの価格の背離の可能性は、価格形態そのもののうちにあるのである。このことは、けつしてこの形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を一つの生産様式に、すなわちそこでは規律 (Regel) がただ無規律 (Regellosigkeit) の盲目的に作用する平均法則 (Durchschnittsgesetz) としてのみ貫かれうるような生産様式に、適合した形態にするのである」(インスティトゥット版、第一巻、一七〇ページ、傍点—マルクス、ゴシック体—山本)。

(26) 「価値法則」の内容にかんして述べられているのは、まさにこの命題である。これについては、後段でふれることにしよう。

みられるように、資本主義社会では、私的所有とこれにもとづく資本主義的生産のおかげで、社会の存続にとって必要な諸生産物が必要なだけつくられなければならないという、社会的自然法則つまり規律が、そのままの形では実現されえないで、つねに必要より過大もしくは過小の生産しかおこなわれないために、価格が価値量より低落または騰貴することによって、これを事後的に「訂正」し、平均的にどうやら必要なものが必要なだけ生産されるという法則が貫かれることになっているということ、価格の価値量からの背離によってようやく事後的に、平均的にのみ、右



の社会的自然法則が貫かれて、資本主義社会が曲りなりに存続しているということが、ここに的確に示されている。資本主義社会に本質的な特徴である「生産の無政府性」という、たった一つの言葉を知っているだけで、「価格の価値量との一致が価値法則の貫徹である」などといった議論がまったくお粗末なものであることは、すぐに思い知られるはずである。スターリンは、右にみたように、「競争、生産の無政府性、過剰生産恐慌」といった重要な言葉をさかんに使っているのであるが、さきにあげた「価格形態の特徴」についてのマルクスの指摘がその念頭にいひとが、これらの言葉の意味をどうして知っているといえようか？ スターリンが、右にみたように——(二)で——「価値法則が、資本主義諸国における生産の増進のテンポが低いにもかかわらず、周期的な過剰生産恐慌にみちびいていく」という、その『驚くべき』事実、こうしたことによって説明される」と述べているのは、まったく見当はずれの「驚くべき」空文句といわざるをえないのである。

スターリンの「価値法則」論でつぎに注意をひくのは、「価値法則が——とくに資本主義社会で——生産の規制者となっている」という主張である。これは、いったい、どういうことを意味するものであろうか？ おそらく、これは、商品生産において、一商品の価格が価値以下に低落すればその商品の生産が減少をよぎなくされ、その反対に、価格が価値以上に騰貴すればその生産の増大が促される、ということを指して言っているものと考えられる。なるほど、資本主義社会においては、事態はこのようになっていると、一応言うことはできる。社会主義社会においては、(四)の説明にあるように、棉花や穀物などの価格を引上げたり、引下げたりして、国家の必要に応じた生産を実現させることが、「価値法則の作用を利用」すること、つまり、「生産の規制者としての価値法則」の利用ということであって、この利用、つまり「価値法則の作用」の制限というのは、この「価格による生産の調整」が「社会主義国

家」の手によって、しかももっぱら「個人的消費物資の生産」に限っておこなわれることを指して言っているものとおもわれる。だが、残念ながら、こうしたことは、ひとつ残らず、マルクスの価値法則とはまったく関係のないことである。それらは、たんに商品価格の騰落によって商品生産が事後的に——ただし、「社会主義社会」では、国家の手によって「意識的に」——「調整」されるということ述べているだけのものである。つまり、それらは、すべて、商品価格のことを言っているだけなのである。ところで、資本主義社会で「生産の規制者」となっているのが「価値法則」だという主張ほど、資本主義生産の本質を無視した銜学的空文句はまたとない。資本主義社会で「生産」を規制するものは、まさに資本<sup>(27)</sup>なのである。資本主義社会で、「生産」のみならず、国民経済のいっさいを規制するものは、資本である。だが、資本の本性、その根本目的は、たんなる価値生産などではなく、最大限の剰余価値の生産であり、正確にいうならば、最大限の利潤獲得である。それゆえ、資本主義社会で「生産の規制者」となっているのは利潤である、ということができる。産業資本主義の段階において、資本による生産を規制するものは、平均利潤であり、いいかえれば生産価格である。

(27) 「資本主義社会では、価値法則が生産の規制者となっている」などという主張を唱えるものは、マルクスがその『経済学批判』への未発表の『序説』のなかで、なぜながたと「経済学の方法」について懇切丁寧な説明をくりひろげているか、なぜそこで、つぎの命題を「結論」としてかかっているかということについて、もちろん、わけわからずにおわらざるをえないのである。

「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出发点にも終点にもならなければならない」(マルクス・エンゲルス全集、第十三卷、六二八ページ、邦訳大月版、六三四ページ、傍点—山本)。

同様にして、右の「結論」の意味内容が理解できない者にとって、なにゆえにマルクスの主著が『資本(Das Kapital)』

と題されているか、この主著の基本課題と根本目的はなにか、ということが永久に解けないということも理の当然といえよう。

資本主義社会で「生産を規制するもの」が利潤にほかならないという、自明の真理は、スターリン自身も感じとっているともみられるのであって、そのことを示しているのは、同じ労作の後段の「七 現代資本主義と社会主義との基本的経済法則の問題」のなかのつぎのくだりである。

「価値法則は資本主義の基本的経済法則ではないのか? いや、そうではない。価値法則は、なによりもまず、商品生産の法則である。それは、資本主義の前にも存在していたし、また資本主義を打倒したのちにも、たとえばわが国では、なるほどその作用範囲を限られているにしても、商品生産と同じように、存在しつづけている。もちろん、資本主義の諸条件のなかでは広い作用範囲をもっている価値法則は、資本主義の生産の発展のうえでは大きな役割を演じるが、しかしそれは、資本主義の生産の本質(!?)や資本主義的(!?)利潤の基礎(!?)を規定し(!?)ないばかりでなく、このような問題を提起することすらしない。……………」

資本主義の基本的経済法則の概念になによりもよく適しているのは、剰余価値の法則、資本主義的利潤の発生(!?)と増大との法則である。それは実際に、資本主義の生産の基本的諸特徴をあらかじめ規定している」(傍点および(!?)—山本)。

ごらんのように、スターリンは、「資本主義の基本的経済法則」は、「価値法則」ではなくて、「剰余価値の法則」であると明記している。「基本的経済法則」という言葉の意味をただしく理解してこれを用いているのであれば、それは、資本主義における「生産および交換」にかんするすべてのことを基本的に規定するものということであ

って、当然に「生産の規制者」ということもふくまなければならない。だが、スターリンは、その「三」では、「価値法則が生産の規制者」だと明記しているのであるから、これはあきらかに自家撞着的発言といわざるをえない。ただし、「資本主義社会のいっさいを支配する」ところの資本にとっては、剰余価値は必然的に利潤という転化形態においてしか捕捉されえないのであるから、資本の運動を規定するもの、「生産の規制者」としての役割を現実には担っているものは、利潤であるといわなければならない。

(28) 利潤 (Profit) は、資本によって生産された剰余価値 (Meinwert) の必然的な転化形態であって、剰余価値が資本による労働力商品<sup>1</sup>の搾取を示す資本主義的概念であるのとまったく同様に、徹頭徹尾、資本主義的概念である。だから、この利潤に「資本主義的」という規定をつけて「資本主義的利潤」という術語をつくりだすことは、誤りであり、無用の混乱をひきおこすものといわざるをえない。というのは、これによって、マルクスの厳密な範疇規定を知らないひとは、「資本主義的」という規定を本質的にもたない利潤が、たとえば「社会主義的利潤」(!!)とか、「全人民的利潤」(!!)などといったものが存在するといった、とんでもない錯覚にとらわれることになるからである。そして、残念ながら、こうした錯覚によって、つまり、マルクスの範疇規定の根本的骨抜きによって、「共産主義社会」にいちはやくゴール・インできるものと宣伝してまわっているのが、ほかならぬ現代修正主義の親方どもとその忠実なエビ・ゴーンであるソ連邦および東独の「マルクス経済学者」たちなのである!!

つぎに指摘されるのは、資本主義社会で「種々異なった生産諸部門間の労働配分の比率を規制するものが、価値法則である」という主張を、スターリンが再三かかげていることである。「種々異なった生産諸部門間の労働配分の比率を規制するものが、価値法則である」という主張を唱えている「マルクス経済学者」は、「価値と価格との一致、すなわち価値と通りの価格で売れることが、価値法則の貫徹である」という「価値法則」論を唱えている者と同様、掃いて捨てるほど多い。だが、残念ながら、後者の議論がまったく見当ちがいでたaramであると同様に、

前者の主張もまったく見当ちがいのたわごとでしかないことは、マルクス経済理論の立場にたつかぎり、これまたまったく明瞭である。なぜ、まったく見当ちがいのたわごとだというのか？ それは、これらの「マルクス経済学者」がマルクスの主著の価値に坎んする説明を正しく把握することをすこしも心がけず、これと関係のありそうな文句をもっぱらマルクスのクレーゲルマンあての手紙（一八六八年七月十一日付）のなかにさがしだし、これをむりやりねじまげて「価値法則」にこじつけて、これで「価値法則」の意味をつかまえたと思ひこんでいるからである。このマルクスの手紙の内容と俗物たちによるでたらめのかじつけについては、前稿『貨幣の範疇規定について』のなかの注（5）において述べられてゐるし、また、そこでも指摘されているように拙稿『人間的労働の経済学的考察（九）』のなかで詳細な論究がおこなわれているので、ここでは、簡単にその誤りを指摘しておくにとどめよう。要するに、マルクスは、そこで、社会的総労働を必要に応じてそれぞれの生産諸部門に配分しなければならないという必要性は、すべての人間社会にとっての社会的自然法則であることを明らかにし、それぞれの歴史的社會でちがうのは、この社会的自然法則そのものではなくて、その法則が貫徹される形態であると説明し、私的生産者の社會では、この社会的自然法則の貫徹される歴史的形態はまさしく交換価値である、と教示しているのである。ところが、この説明にすぐつづいて、——ただし、行を改めて——マルクスは、「価値法則がどのように貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、科学はあるのです」（傍点—マルクス）という文章をかかげているので、この文章の意味内容を読みとりえない、それこそ「現象にとらわれた」俗物的「学者」は、これをすぐ前の説明にひきもどして、「社会的労働を必要に応じて生産諸部門に配分する法則」がすなわち「価値法則」だと早合点しているのである。マルクスは、同じ手紙のなかで、「俗流経済学というのは、現実の、日々の交換価値と価値量とが直接には同一ではありえないということ

に、すこしも気がつかない者のことです」(傍点—マルクス)と述べて、これらの「仮象にしがみつく」連中にたいして、「それでは、いったい、なんのために科学がいるのです」と痛烈な批評をあたえているのである。それゆえ、「種々異なった生産諸部門間の労働配分の比率を規制するのが、価値法則である」などという「価値法則」論にかじりついている者は、いずれも、マルクスとは無縁の、俗流経済学者といわざるをえないのである。なお、補足しておくならば、資本主義社会で「種々異なった生産諸部門間の労働配分の比率を規制する」ものは、ほかならぬ利潤であり、産業資本主義の段階においては、それは平均利潤または生産価格であるといわなければならないのである。

(29) 本誌第三十一巻第一号、五九—六〇ページ参照。

(30) 本誌第二十九巻第三号、二二四—二三三ページ参照。

スターリンは、右の(※)において、「価値は、価値法則と同じように、商品生産の存在と結びついた歴史的な範疇である」と述べている。もし彼が、この「歴史的範疇」という自身の用語の意味内容を厳密に把握していたならば、「商品生産」も「価値およびその諸形態も、価値法則も」、すべて、特定の歴史的な生産関係、すなわち私的所有に規定された歴史的範疇であること、「社会主義社会」の基本的生産関係はまさに私的所有に対立する社会的所有であって、したがってそこには「商品生産、価値およびその諸形態、価値法則」という歴史的範疇は存在しえないことを、ただしく認識できたはずである。ところが、レーニンとちがって、「歴史的な範疇」を理論的に厳密にとらえることができず、とりわけ、「価値法則」とはどういうことかという肝腎の意味が全然つかめないような理論水準をもつてしては、「社会主義社会」ならぬ過渡期の現実の複雑な諸関係と経済的諸現象を的確に分析する力に欠けるのは当然であって、もっぱら「共產主義建設」という目先の目標にむかつての日常的活動のために「価値法則の利用」

などといった、まったく見当ちがいの言葉がわけわからずにふりまわされることになるのである。<sup>(31)</sup>

(31) スターリンは、右の(1)で、「社会主義社会」では、「価値法則が種々異なった生産部門間の労働配分の『比率』を規制しているかのようにいう主張もまた、まったく正しくない」と述べているが、これは、「労働配分の比率を規制する」ものが「価値法則」だという、でたためめの「価値法則」論にとらわれていることを、みずから告白しているものといつてよい。

「価値法則」についてのでたためめの解釈、いいかげんな用法は、スターリンのみならず、一般に猖獗をきわめ、マルクス経済理論の発展にとつてはかりしれない害毒を流しているのが、残念ながら、今日の実状である。わたくしは、さきに前稿『貨幣の範疇規定について』(本誌第三十一巻第一号所載)のなかで——序論的な意味で——商品および貨幣というもつとも重要な範疇の正確な把握を示しておいたが、そこでの説明とスターリンの「商品生産」および「価値法則」にかんする説明とをつきあわせてみれば、事柄は容易にとらえられるであらう。基本的範疇の把握の当否は、当の論者の唱えるいっさいの「理論」の成否を決定するものである。そこで、スターリンの所論のみならず、反スターリン的修正主義の親方どもやその無数のエビゴネン<sup>(32)</sup>「マルクス経済学者」たちの「価値および価値法則」にかんする「理論的」おしゃべりがどんなものであるかということを十二分に玩味することができるように、さきに述べた「商品、価値および価値法則」の基本的な内容を、まとめてわかりやすく示してみることになしよう。<sup>(32)</sup>

(32) この種の要約的説明によってまた、スターリンが「共産主義の第二段階」について述べているさきの(1)について、そのどこに問題があるのか、彼の「共産主義への移行」論の問題点はなにか、ということも、明らかになるものと期待されるのである。

## 九

まず、商品は、私的所有という特定の歴史的生産関係に規定されて労働生産物が必然的に——法的に——とらざるをえないその社会的形態である。商品は、私的所有、いいかえれば私的労働と不可分に結びついた基本的範疇であって、私的所有という生産関係が存在しなければ、商品は存在せず、この基本的範疇も成り立たない。私的所有の必然的な物的表現であるからこそ、商品はもともと基本的な経済学的範疇なのである。このことは、『資本論』第一章全体が、いや、『資本論』全三巻が疑う余地なく明示しているところである。私的所有と不可分に結びついた範疇として商品を基本にすることでマルクス経済理論は真に科学的理論として組立てられているのであって、このことを明確に把握しなければマルクス経済理論はほんのこれっぽっちも理解されえないといつてよい。

(33) ここでは、例としてマルクスの二つの明確な命題をあげておこう。

「ただ、独立におこなわれていて互いに依存しあつていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相對するのである (Nur Produkte selbständiger und von einander unabhängiger Privatarbeiten treten einander als Waren gegenüber.)」(インスティトゥート版、第一巻、四六ページ、傍点およびイタリック体—マルクス、ゴシック体—山本)。

「およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはかならない (Gebräuchsgegenstände werden überhaupt nur Waren, weil sie Produkte von einander unabhängig betriebener Privatarbeiten sind.)」(前出、第一巻、七八ページ、傍点およびイタリック体—マルクス、ゴシック体—山本)。

商品が私的所有と不可分に結びついた歴史的範疇であるのとまったく同様に、価値もまた、私的所有と不可分に結びついた経済学的範疇である。価値は商品価値にはかならず、商品のないところに価値は存在しない。価値 (Wert, value, valeur) という言葉は、通俗的には、ねうち、人間にとってのねうちを意味するものとしてつかわれている。たとえば、ある労働生産物——それは、商品でなくとも、自家消費用の生産物であってもよい——をつくりだす



ために二日間労働したとか五百円かかったとかいうときには、それは、生産者にとって二日分の労働に値した、つまり二日分の労働の価値をもっているとか、そのねうち、つまり価値は五百円である、と言う。この場合の価値は、経済学的範疇としての価値、商品価値とは根本的にちがうものである。スミス、リカードウらの古典学派は、このような通俗的な価値概念にとらわれていたために、ブルジョア経済学としては比較のもっとも科学的なものではあったが、破産をとげざるをえなかったのである。科学的な価値概念をはじめて確立したのは、唯物史観の見地にただしく立脚して、資本主義社会の経済的運動法則をみごとに暴露したマルクスそのひとである。つぎに、マルクスの価値概念の基本的内容を列挙してみよう。

1 価値は、商品の価値である。それは、私的所有のもとで私的労働によって生産された商品だけがもっている価値である。社会的所有のもとでの労働生産物は、商品ではありえず、価値をもつことはない。価値は、私的所有と不可分に結びついた経済学的範疇である。

2 価値は、人間にとつてのねうち、商品の人間にとつての役立ちではない。まさにその逆である。価値は、商品そのものが、人間とは無関係に、むしろ人間に対立する物としてもっているねうちである。それは、人間を支配するところの、商品そのものの社会的なねうちであり、すこしく誇張しているならば、人間に対立して商品そのものもっている社会的な力であるといつてよい。

(34) マルクスの価値概念の決定的な重要性をしばしば指摘しているのは、彼の盟友、エンゲルスである。なかでも『資本論』第二巻の「序言」に記されているつぎの説明は、いわば金文字ともいふべきものである。

「剰余価値がなんであるかを知るために、彼〔マルクス〕は、価値がなんであるかを知らなければならなかった。リカードウの

価値論そのものがまず第一に批判されねばならなかった。かくしてマルクスは、労働を研究してその価値形成的な質に達し、そしてはじめて、いかなる労働が、なにゆえに、またいかにして価値を形成するかということ、および、価値とは総じてこの種の凝固した労働以外のなにもでもないということを、確定した」(前出、第二巻、一六ページ、傍点—エンゲルス、ゴシック体—山本)。

つぎに述べる3以下の説明は、このエンゲルスの指摘のうちわたくしがゴシック体で示した個所の内容を、いわば敷衍したものであるということができる。

3 私的所有のもとの私的生産者の労働は私的労働であるから、その生きた、そのままの労働では、社会的労働となることができない。だが、私的生産者の労働が私的労働であるかぎり、それが社会の存続を支える社会的労働に成らないかぎり、社会も当の生産者自身も存続することはできない。私的労働は社会的労働に成らなければならないが、では、どのようにしてそれは社会的労働と成るのであるか？ それは、生きた、そのままの労働としてでは社会的労働に成りえない。それは、対象化した形態において、労働生産物に物化した形態において、はじめて社会的労働となることができるのであり、またそうした形態で社会的労働に成らなければならない。

私的労働の社会的労働への生成をただしく認識するためには、労働の二面性の把握が不可欠の要件となっている。マルクスが、「経済学の理解がそれをめぐって回転する心樑 (Spingpunkt, Pivote)」と呼んだ「労働の二面性の把握」は、この経済理論のうちのもっとも基礎的な価値概念の理解にとって決定的な意義をもつものである。

私的労働は、まずその一面の具体的労働をもって、労働生産物の社会的に有用な自然的形態をつくりだす、つまり、具体的労働を労働生産物の社会的使用価値として対象化させなければならないが、それと同時に、他の一面の抽象的・人間的労働を同じ労働生産物に対象化させてその価値としなければならない。かくして、具体的労働の対象化

Ⅱ物化としての社会的使用価値と抽象的・人間的労働の対象化Ⅱ物化としての価値とをもつ労働生産物Ⅱ商品を社会に出してみても、つまり私的交換に出してみても、そこでその労働生産物Ⅱ商品が首尾よく社会的使用価値と価値とをもつものであることが実証されたときにはじめて、それを生産した私的生産者の私的労働は社会的労働に成るのである。そして、そのときはじめて、社会的労働を担ったものとして、彼は、その労働生産物Ⅱ商品の価値の大きさに応じて、社会から彼の必要とする労働生産物Ⅱ商品——私的交換を通じて——うけとることができるのであり、またうけとらなければならないのである。

4 それゆえ、私的所有のもとでは、ある個人がどんなにすぐれた資質をもっていて社会的に有用な仕事をしていて、したがってその人間的価値がどんなに高いとしても、彼は、人間としては社会からなにもうけとることはできない。ここでは、人間ではなくて物が、労働生産物Ⅱ商品だけが、しかもその価値だけがいっさいを支配する。私的生産者自身が、彼の労働してつくった商品そのものの価値によって、完全にひきまわされる。これこそ、まさにマルクスによつてはじめて解明された商品の特質、その物神的性格である。物神的性格をもたない労働生産物は、経済学的範疇としての商品ではない。価値は、商品の人間支配、つまりその物神的性格の核心をなすものである。

5 どの私的生産者の労働も具体的労働と抽象的・人間的労働との二面から成っているのであるから、彼が労働して生産物をつくれれば、いつでも、そのまま商品価値をつくりだすことができるかといえば、けつしてそう簡単にはいかない。まず第一に、彼の具体的労働によつてつくりだされた生産物の自然的形態が現実社会的価値をもつものでなければならぬ。社会的価値をもたなければ、どれほど人間的労働がふくまれていても、それは価値をもたない。ところが、労働生産物が社会的価値をもつか否かは、生産がおこなわれている過程では、またそれが

完成した時点でも、当の私的生産者にとっては全然わからない。その労働生産物 $\parallel$ 商品 $\parallel$ 私的交換のために、つまり販売のために市場に出したときにはじめて、そこで判明するのである。しかし、社会的使用価値をもつか否かは、経験によってあらかじめ大体を知ることができるとみてもよい。だが、私的生産者にとって絶対にとらえることのできないのは、商品のもう一方の要因である価値である。

商品価値は、私的生産者の労働の一面である抽象的・人間的労働の対象化 $\parallel$ 物化であるといっても、その人間的労働はけっして簡単なものではない。なるほど人間的労働とはたんなる人間労働力の支出であり、同じ人間の脳髓、筋肉、神経、手、足などの生産的支出一般であるから、どの人間の人間の労働も同じもの、同じ質のものであるように考えられる。だが、実は、各個人の人間の人間の労働の質はけっして一様ではないのである。とくに私的所有にもとづく商品生産社会では、各個人の担っている人間労働力は千差万別であり、したがって、その個人的人間労働力の支出 $\parallel$ 流動としての各個人の人間の労働の質も千差万別とならざるをえない。だが、商品価値については、どの商品の価値であらうと、そこに質的差異があつてはならない。どの商品価値も、当然同じ質の価値でなければならない。それゆえ、各個人の人間の労働も、およそ価値を形成するものであるかぎり、同じ質のもでなければならない。ここに、それぞれ質の異なった個人的人間労働力が、その力の発現において、同じ質の人間労働力として作用し、同じ質の社会的・平均的労働力の支出 $\parallel$ 流動として商品に対象化しなければならないという、重大な問題がひそんでいるのである。ところで、生産における人間の労働の質を規定するものは、労働の強度と熟練との二つである。同じ質の人間の労働とは、労働の強度および熟練の社会的平均度をもつておこなわれる人間労働力の支出 $\parallel$ 流動にほかならない。それゆえ、各私的生産者のそれぞれ異なった質の個人的人間労働力は、その支出 $\parallel$ 流動の過程で、現実と同じ質

の社会的・平均的労働力として作用し、同じ質の社会的・平均的労働への「還元」をなしとげることによって、はじめて商品価値として対象化することができるのである。とはいえ、このような社会的・平均的労働という同じ質のものへの「還元」は、その個人的労働力の支出⇨流動がおこなわれている労働過程においては、まったくおこなわれえない。すでに労働過程が終わり、それぞれ質の異なった個人的労働力の対象化⇨物化した労働生産物⇨商品が市場にもちだされ、そこでの他の諸商品とのあいだの無数の比較⇨交換を通じて、そこにはじめて社会的・平均的労働が——すべての私的生産者の背後で彼らの知らないうちに——きまり、それと同時に各私的生産者のまったく知りえない社会的・平均的労働への「還元」がおこなわれ、各私的生産者の私的・個人的労働はそれぞれある一定量の価値としてその私的生産物⇨商品に対象化することができる。こうした社会的・平均的労働への「還元」は、始めから終わりまで私的生産者にはまったく意識されることなく、無数の交換過程を通じておこなわれ、しかも、その「還元」によって各私的生産者の私的労働がどれだけの量の社会的・平均的労働としてどれだけの量の商品価値に対象化したかということ、は、いっさい知ることができない。さらに、たとえ、同じ質の社会的・平均的労働を同じ量だけ投下したとしても、それだけでは、商品価値の大きさはきまらないのである。なぜならば、商品価値の大きさはつねに単位商品のうちにふくまれる価値の大きさにほかならないのであって、そのため、同じ質、同じ量の人間の労働が対象化する労働生産物⇨商品の総量のいかんによって、商品価値の大きさは異ならざるをえないからである。ここで、主体的な人間の労働の対象化する労働生産物の総量を規定するものとして、われわれが考慮にいれないといけないのは、生産諸条件である。同じ質、同じ量の人間労働力の支出が、労働生産物⇨商品への対象化形態において現実には社会的・平均的労働として妥当するためには、それが対象化する商品の総量が社会的・標準的でなければならず、したがって、

生産諸条件は社会的・標準的なものでなければならぬのである。このようにして、一商品の価値の大きさは、現存の社会的・標準的な生産諸条件のもとで、労働の熟練および強度の社会的平均度をもってその生産に支出された人間の労働の分量によって規定されるという、マルクスによつてはじめて確立された価値法則の核心が導き出されるのであるが、このことはまた、一商品の価値の大きさはその生産に社会的に必要な労働時間によつて規定されるというように言いあらわすことができる。ただ、この生産諸条件についても、さきの人間の労働について指摘されたところと同様のことが、つまり、社会的・標準的な生産諸条件なるものは、けつしてとらえることができないということ、それは、いかなる生産者によつても、またいつ、いかなるときにも、つまり、生産の場でも、市場においても、絶対にとらえないものだということを強調しておく必要がある。さきと同じように、出来あがつた商品を市場に出したところで、あらゆる商品種類との無数の比較Ⅱ交換を通じて、したがつてまた市場での競争全体を通じて、事後的に、近似的に社会的・標準的なものが——私的生産者の知りえないところで——きまるだけである。

ところで、右に述べたような、社会的・平均的労働への「還元」と社会的・標準的な生産諸条件とによる商品価値の規定については、それが現実に妥当するにあたつては、つぎのような形を必然的にとるものだということを指摘しておかなければならない。つまり、各個別的・私的生産者の個人的労働力も、したがつてまたその個人的な人間の労働も、その個別な生産諸条件も、實際千差万別であるが、それでもかまわない。彼が、同じ商品を生産するさい、社会的に必要な労働時間と同じだけの労働時間によつてそれを生産することができれば、たとえどのように質がちがつていようとも、彼の個人的労働力は、社会的には、いずれも同じ社会的・平均的労働力として作用したことになり、したがつて、社会的・平均的な人間的労働という資格において、りっぱに社会的に妥当する一定分量の価値をつくりだ

したことになるのである。それゆえ、社会的必要労働時間と同じ分量の労働時間をもって生産することのできない個人的労働は、単位商品に対象化しているものがそのまま社会的・平均的労働に「還元」され、その商品価値を形成するものとして社会的に妥当することを通じて、いいかえれば、彼の私的・個人的労働は対象化形態における社会的・平均的労働への「還元」を通じて、つまり物化形態から「逆算」されてその社会的妥当性と価値量がきまることになる。ただし、こうした「還元」および「逆算」についても、私的生産者がまったく感知しえず、逆にそれらによってひきずりまわされるということは、さきに述べたところと同じである。要するに、社会的・平均的な質の人間の労働も、社会的・標準的な生産諸条件も、したがってまた、一商品の生産に社会的に必要な労働時間も、一商品の価値の大きさも、ひとつのこらず、私的所有にもとづく商品生産社会の成員たるすべての私的生産者にとっては、とらえることも、想像することすらも、できない。マルクスがはじめて明確にした価値規定も、これを基本とする価値法則も、なにひとつ私的生産者が認識することはおろか、たんに感知することすら、完全に不可能であるばかりでなく、私的生産者ひとりのこらず、反対にこれによって完全に支配され、最後までひきずりまわされるしかないものなのがある。価値法則は、これを簡単に言いあらわすならば、一商品の価値の大きさはその生産に必要な社会的・平均的労働の分量によって、つまり社会的必要労働時間によって規定され、かくして規定された価値の大きさにしたがって商品が交換される、ということである。なお、これについては、つぎの説明をつけくわえておかなければならない。

6 価値法則により、商品の価値の大きさが社会的必要労働時間によってきまり、その価値の大きさによって、その商品の、市場における他の商品との交換が規定されるということは、第一に、商品の価値の大きさは絶対的にはとらえることができず、また労働時間をもって表示することはできないこと、それはただ、他の商品との交換の比率、

いいかえれば交換におけるねうち、交換価値という形で、間接的・相対的にしかとらえることができないものだ、ということの意味する。たとえば、二〇エルレのリンネルの価値は一着の上衣と同じだけである、というようにしか表現されないのである。第二に重要なことは、価値法則により、一商品の価値量によってその他の商品との交換比率、つまり、その交換価値がきまるということは、けっして、その交換比率または交換価値が、価値の大きさとびったり一致することの意味するものでない、ということである。さきの例で、二〇エルレのリンネルの価値が社会的必要労働時間で二時間、一着の上衣の価値が同じく二時間であるとき、二〇エルレのリンネルの交換価値は、必ずしも一着の上衣であるとはかぎらない。マルクスが明示しているように、交換価値は、本質である商品価値の必然的な現象形態にほかならないのであって、この現象形態が本質に一致していることは、むしろ例外的であり、限られた条件のもとでしかありえない。私的所有にもとづく商品生産の発展した資本主義社会では、生産の無政府性が支配しており、最大限の利潤追求のための資本による生産はつねに社会的必要に一致することはできず、変動つねなき需給関係が市場における諸商品の交換価値 $\parallel$ 価格をつねに価値の上または下に動かして、「事後的訂正」をおこなわざるをえない。ここでは、商品の価値の大きさがどのようにして規定されるかは感知することすらまったく不可能であるが、その価値がどのようにしてある特定の大きさの交換価値 $\parallel$ 価格として現われているかということも、まったくわからないのである。

(34) 「現象と本質とが一致するならば、およそ科学は不要である」ということは、マルクスとエンゲルスがそれこそ口を酸っぱくしてわれわれに教えているところである。価値法則については前稿、『過渡期の経済法則の考察』の注(8)で引用したクルゲルマンあての手紙の中で、右の引用個所にすぐひきつづいて、マルクスは、

「そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換をその特徴としているような社会状態で、この労働の一定の割合



での配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換、価値にはかならないのです。

価値法則がどのよう、に貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、科学はあるのです。」

と、懇切丁寧に教示しているのであるが、マルクスの価値概念を真剣に学びとろうとしない自称「マルクス経済学者」の眼には、この教示はまったくはいらないのである。なお、「価値と価格との一致」をもって「価値法則の貫徹」だとする同じく自称「マルクス経済学者」にとつて永久に手のとどかない、だが価値法則のなんたるかを的確に教示しているマルクスの叙述を、これまでの要約の裏付けとして、参考までにつぎにかかげておこう。

「互いに独立に営まれながらも社会的分業の、自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の、偶然的な絶えず変動する交換比率を通じて、それらの生産物の生産に必要な労働時間が、たとえば誰かの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫かれるからである、という科学的認識が経験そのものから生まれてくるまでには、十分に発展した商品生産が必要なのである。それだから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価格の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。その発見は、労働生産物の価値量のたんに偶然的な規定という外観を揚棄するが、しかしけつしてその物的な形態を揚棄しはしない」(インスティトゥート版『資本論』第一巻、八〇—八一ページ、傍点—マルクス、ゴシック体—山本)。

ここできわめて控え目に述べられている「科学的認識」をなすとげ、「秘密」を解明した当の人がほかならぬマルクスそのひとであるということも、もちろん、自称「マルクス経済学者」にとつてはついにわからないままなのである。

7 以上、商品、価値および価値法則について明らかにされた基本的内容は、そのまま貨幣という経済学的範疇にとつての同じくもつとも重要な基本を成すものである。つぎに、貨幣の基本的内容を簡単に列挙してみよう。

イ、貨幣は、私的所有にもとづく商品生産社会の、もつとも基本的な範疇である。私的労働がなければ商品はなく、商品がなければ貨幣商品はない。

ロ、私的労働の生産物である商品は、それに投下された個人的な人間的労働を社会的・平均的な人間的労働の対象

化として、つまり商品そのものの価値として社会的に妥当に——だが、相対的にのみ——表示しなければならないのであって、商品世界は一般的等価物としての貨幣商品を必然的に生み出すのであり、また、貨幣商品なしには商品生産社会は存続しえない。

ハ、貨幣商品も、私的労働の生産物である。だが、その自然的形態そのものが、直接に価値を現わすものとなり、貨幣商品Ⅱ金を生産する具体的労働がそのまま抽象的・人間的労働を現わすものとなり、したがって貨幣商品Ⅱ金を生産する私的労働が直接に社会的な労働を現わすものとなるという、特別の社会的性質をもつのであり、またそうした特別の社会的形態をそなえているからこそ、それは貨幣商品として、あらゆる労働生産物Ⅱ商品と直接に交換されるものとなっているのである。

ニ、貨幣はまた、使用価値および価値という、対立物の統一である商品が、現実の商品に成る運動過程、つまり交換過程における矛盾、すなわち、社会的な使用価値としての実現と価値としての実現という、矛盾を解決するものとして、必然的に生まれたものである。この矛盾の存しないところに、貨幣商品は存在しえない。簡単にいえば、私的労働と社会的労働との矛盾こそ、まさに貨幣商品を生み出したのである。

ホ、貨幣は、けっして商品の価値を直接に、社会的必要労働時間〇〇時間というように表示することはできない。私的労働の生産物が商品とならなければならないからこそ、そして、商品に対象化した私的・個人的労働が商品そのものの価値とならなければならないからこそ、その価値を相対的に表示するものとして貨幣商品が必然的に生まれたのである。

ヘ、貨幣商品Ⅱ金は、地中からでてきただけで、すでに価値の結晶であり、いっさいの社会的富を支配し、人間を

支配する力をそなえている。こうした物神的性格をもたないものは、貨幣ではない。

(36) 貨幣という範疇の基本的内容をもっとも厳密・正確に解明しているのは、いうまでもなく、『資本論』第一卷第一篇である。ここでは、当面の問題究明にとって比較的最も適切とおもわれる命題をひとつだけあげておこう。

「困難は、貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく、いかにして、何故に、何によって、商品が貨幣であるかを把握する点にある (Die Schwierigkeit liegt nicht darin zu begreifen, daß Geld Ware, sondern wie, warum, wodurch Ware Geld ist.)」(前出、九八ページ)。

なおこの論者が「貨幣とは商品交換のための便利な道具もしくは商品の社会的ねうちの計算＝表示の道具である」などといった、典型的俗物の觀念にとらわれているか否かということは、彼がつぎのエンゲルスの的確な指摘(前出、本稿六一―六二ページ)を知っているかどうかということで、簡単にわかるのである。

「剰余価値がなんであるかを知るためには、彼「マルクス」は、価値がなんであるかを知らなければならなかった。リカードの価値論そのものがまず第一に批判のもとにおかれねばならなかった。こうして、マルクスは、労働を研究してその価値形成的な質に到達し、そしてはじめて、いかなる労働が、なにゆえに、いかにして価値を形成するかということ、および、およそ価値とはこの種の労働の凝固したものにはかならないということを、確定した。——これこそは、ロードベルトウスが最後まで理解しなかった点である。ついでマルクスは商品と貨幣との関係を研究して、いかにして、なにゆえに、商品に内在する価値属性によって、商品が、そして商品交換が、商品と貨幣との対立を生みださざるをえないかを論証した。この論証の上に築かれた彼の貨幣理論は、最初の全面的な貨幣理論であり、今では暗黙のうちに一般に承認されているものである」(前出、『資本論』第二卷の「序文」、一六ページ、傍点―エンゲルス、ゴシック体―山本)。

## 十

以上、経済学的範疇としての商品、価値、貨幣および価値法則について、その基本的内容を厳密に規定する場合に、はそれらはどのように把握されなければならないかということを、マルクス・エンゲルスの見地から簡単にみてきた。

いやしくもマルクス経済学の立場に立つかぎり、われわれは、これらの範疇にたいして、右とちがった内容をあたえたり、あるいは皮相な俗物的表象をもつてとらえたり、またそういう俗物的用法にしたがったりしてはならない。そのためにこそ科学としての経済学があるのである。では、これまでわれわれが見てきたスターリンのこれらの言葉についての理解と用法は、はたして、マルクス経済学の立場にたゞしくそつたものといえるであろうか？ 残念ながら、右の基本的諸概念についての彼の理解と用法はいずれも問題あるものといわざるをえない。そのもっとも致命的な根本的欠陥は、彼が、これらの範疇を、私的、所有という歴史的生産關係に結びついた特定の経済学的範疇であるという点を明確にとらえていない、ということにある。

まず、商品、価値、貨幣について、彼が私的所有の存在していない、「社会的所有」にもとづく「社会主義」社会において、これらの範疇がそのまま妥当するものと思ひこんでいるのは、まったくの誤りである。そこでは商品と貨幣は、なるほど、私的所有にもとづく商品生産社会におけるものと、外見上は同じ形態をそなえているように見える。だが、外からみた形態が酷似しているからといって、それらの本質が同じものとは、けつしていえない。肝腎なことは、どんな生産關係に規定されているか、またその社会的形態の本質はどんなものであるか、ということを的確に把握することである。「社会主義」社会の労働生産物も使用価値と「価格」をもっており、そのかぎりで資本主義社会の商品と同じく、商品であるように見える。だが、それは、私的労働の生産物でないならば、競争を通じての私的・個人的な人間の労働の社会的・平均的な人間の労働への「還元」もなければ、人間を支配する商品価値もなく、したがって使用価値と価値との対立矛盾もなければ、いっさいの富を支配する貨幣商品もありえない。したがって、その「価格」は、商品価値の貨幣商品による表現ではありえないのである。だが、わたくしがすでにたびたび指摘した

ように、ソ連邦と中国は、まだ完全な社会主義社会ではなく、それへの過渡期にある社会であり、したがって複雑な生産諸関係をそのうちにふくんでおり、簡単に社会的所有かまたは私的所有か、二つに一つといったとらえ方は許されないし、またそうした一義的なとらえ方はまったくの誤りである。しかも、それらの過渡期社会の内部的諸関係はたえず流動し、発展しているのである。むしろ、決定的な問題は、私的所有と私的労働が<sup>(37)</sup>わずかに残存するかもしくはほとんど改造されつくされた現在の「社会主義」社会において、なぜ資本主義社会における商品および貨幣と外見上きわめて酷似している「商品」および「貨幣」が存在しているのか？そして、それらは、どんな社会的本質をそなえた形態規定があるのか？という点をたゞしく解明することである。このもつとも重要な問題については、行論でたちいった考察が必要であるが、ここでは、ひとまず、資本主義社会におけるもつとも基本的な範疇である商品および貨幣を現在の過渡期社会について、なんらの限定なしに、そのまま適用して、そこに商品および貨幣という経済学的範疇を認めることは、理論的にみても、実践的にみても、きわめて危険な根本的誤謬であるということを、指摘しておくにとどめよう。

(37) 私的所有および私的労働ということは、けっして皮相に、一面的に解釈してはならない。たとえば、マルクス経済学の代表的な俗物的改ざん者<sup>1</sup>宇野弘藏氏は、原始共同体や奴隸制または封建制のもとでも商品交換が存在したという事実をとらえて、「商品、貨幣、資本は、生産関係とはなんの関係もない形態だ」という、まことにめざましい反マルクスのたわごとを吹聴しているのであるが、これなどは、弁証法的思考能力の欠如を自己暴露するだけの意味しかもない。マルクスは、『資本論』第一巻第一章で、

「商品交換は、諸共同体の終るところで、諸共同体が他者たる諸共同体または他者たる諸共同体の成員と接触する点で、はじまる。」(前出、九三ページ、傍点—山本)

と説明している。共同体は共同的所有にもとづき、そこには私的所有はひとかけらもない。だが、A共同体とB共同体とは相互に他者であり、したがって——両者の間で交換のおこなわれるかぎり——相互に私的所有の関係にある。このような共同体は、内部的には共同的所有の關係に、対外的には私的所有の關係にあり、こうした二面においてたゞしくとらえることが、まさに弁証法的把握なのである。したがって、共同体の労働生産物は、内部的には商品ではないが、対外的には商品なのである。こうした複雑な諸關係を——しかも、それらの発展・變化の過程において——とらえるところにこそ、マルクスの弁証法的把握の真価があり、またそれによって、はじめて過渡期の経済諸形態の確な究明が可能となるのである。

「商品」および「貨幣」とちがって、価値および価値法則については、資本主義社会における価値および価値法則と酷似した形のものを見出すことは、まったく不可能である。ただし、価値については、さきに詳しく述べたマルクスの価値概念とはまったくちがった、通俗的な意味での価値、つまり古典学派がそれにとらわれたと同じ価値、いいかえればねうち、人間にとつてのねうち、もしくは人間にとつて要費したねうちを意味するものとして用いることは可能であり、また必要でもある。だが、価値法則については、そういうことはまったくありえない。そもそも、価値法則などというものは、社会主義社会はもちろんのこと、国家的所有と集団的所有を基本とする過渡期社会には、影も形も存在しないのである。それゆえ、価値法則にかなするスターリンの所論については、つぎのような論評が必要とならざるをえないのである。

1 価値法則についての救いがたい誤解と完全な没理解。もっとも肝腎なことは、なによりもまず、価値法則とはなにかということ<sub>を</sub>明確にとらえ、それが資本主義社会でどのように貫徹しているかを把握することである。

2 価値法則が私的所有および私的労働との結びついた歴史的範疇であることが理解されていない。したがって、彼がかかげている「歴史的範疇」という基本的用語も、実はよくわかっていないでつかっていることがわかる。

3 「社会主義」社会には、価値法則など、介在する余地はない。影も形もないのに、彼は、それが存在すると思  
いこんでいる。

4 百歩ゆずってかりに価値法則が存在するとしても、それは、その社会の人間が、逆立ちしてもとらえられるよ  
うなものではない。それゆえ、「価値法則の利用」などという言葉そのものが、完全なたわごとなのである。

5 もし価値法則が現実存在し、<sup>ゲルラ</sup>妥当しているならば、その社会は、「社会主義」社会どころではなく、私的所  
有と私的労働を基本とする完全な私的商品生産の社会でしかない。またもし、私的所有と私的労働がないならば、価  
値法則は完全に存在の余地はないのである。

6 スターリンが「価値法則の利用」という、完全に誤った、無内容の言葉をもって言いあらわそうとした事実は、  
おそらく、労働生産物の生産費または原価をただしく考慮に入れるということである、と推察される。労働生産物の  
社会的生産費または生産原価をできるだけ正確に計算してとらえ、生産および分配における重要不可欠な一基準にし  
なければならないということは、過渡期社会のみならず、共産主義社会でも同様に妥当するものであり、さらにかの  
ロビンソンの社会にも妥当するものである。だが、これはマルクスも明確に述べているように、まさに「価値諸規定  
の内容 (der Inhalt der Wertbestimmungen)」<sup>(38)</sup>にはかならないのであって、価値法則そのものとはなんの関係もな  
いことであり、ましてや、これを「価値法則の利用」などと称することは、理論的錯乱を露呈するものとはい  
うがないのである。

(38) 前出、『資本論』第一巻、七七ページおよび八二ページ参照。

要するに、マルクス経済学のもっとも重要な基礎をなす価値概念についての甚しい誤解あるいは没理解という、致

命的欠陥をもっているために、俗物的先入見に支配されて「価値法則の利用」などという、根も葉もない観念的創造物が生みだされたものと考えられる。スターリンは、さきに引用した(※)のなかで、「価値は、価値法則と同じように、商品生産の存在と結びついた歴史的な範疇である」<sup>(38)</sup>という、理論的に正しい主張を述べているのであるが、肝腎の商品生産について、それがどういう歴史的な生産関係に規定された範疇であるかという点を掘り下げえなかった。したがって、彼が、さきにみたように、「剰余価値、資本、資本の利潤、平均利潤率」などの経済学的範疇が「社会主義」社会に介在する余地はないという、理論的に正しい指摘をしているのは、マルクス経済理論の正確な弁証法的把握にもとづくものというよりは、むしろ、プロレタリア革命の指導者として彼が身につけていた直観によるところが多かったものと推察されるのである。こうした薄弱な理論的基礎づけによっていたからこそ、彼の歿後、現代修正主義の親方どもの支配下で、この「社会主義」国でたちまちのうちに、骨の髄から俗物的な「利潤」論が猖獗をきわめるといふ事態が必然的に生まれたのである。いずれにせよ、価値法則にかんする問題でスターリンが完全に俗物的見地におちこんだという事実、マルクス経済理論の的確な弁証法的把握とその厳密な適用というものが、言うは易いが、どんなにむつかしく骨のおれるものであるか、しかも、それをなしとげることがどんなに緊要であるかということとをわれわれに教示しているものといえよう。たとえば、『資本論』第一巻第一篇に示されている商品および貨幣にかんする基礎理論は、たんに資本主義社会の分析にとって不可欠であるばかりではない。それらの基礎理論の弁証法的把握が真価を発揮するのは、むしろ、資本主義社会のあとにくる過渡期社会の分析においてであり、過渡期における緊切な実践的課題の解明においてであるといわなければならない。そのことは、とりもなおさず、右の基礎理論の上に展開されているマルクス経済理論を真に正しく理解しているか、あるいはその粗雑な俗物的解釈にとらわれて



いるかということが、過渡期への適用の場において、すっかり明るみに出るということの意味しているのである。

(38) スターリンは、この文章につづいて、(4)で、「商品生産の消滅とともに、価値およびその諸形態も、価値法則も、消滅するだろう」と述べ、ついで(5)において、

「共産主義の第二段階では、生産物の生産についてやされた労働の量は、商品生産のもとでのように回り道をしてではなく、価値およびその諸形態を媒介としてではなく、そのまますぐに、直接に——生産物の生産に支出された時間の量によって——はかられるだろう。」

と主張している。この(4)の主張は、エンゲルスが『反デューリング論』の中で述べている周知の命題(前稿、『貨幣の範疇規定について』の注(2)を参照)をうのみにしてくりかえしただけであるが、彼が理解している内容は、エンゲルスとはまったくちがっている。彼は、「共産主義の第一段階」では、「商品生産、価値およびその諸形態、価値法則」があるが、その「第二段階」では、それらがなくなる、と主張しているのである。これは、「商品生産、価値およびその諸形態、価値法則」がすべて私的所有および私的労働と結びついた歴史的範疇であって、「第一段階」には存在しえないものだということ、および、これらの諸範疇が妥当する社会状態から「直接労働時間によって量られる」「第二段階」にいたるまでには、きわめて長期の、複雑な過渡的段階が介在しなければならぬということをまったく理解しえない、観念的独断以外のなにものでもなく、歴史的範疇という自身の用語についての完全な没理解を露呈するものといわなければならない。

ところで、スターリン抹殺に狂奔する二面派修正主義の親方、フルシチョフ・ブレジネフに追隨するソ連邦およびドイツ民主共和国の「マルクス経済学者」がごぞつて、『スターリン論文』からの剽窃で官許『社会主義経済学』を構築しているという事実について、すでに前稿『過渡期の経済法則の考察』の中の注(9)で実例をあげて示しておいたが、こと価値法則にかんしては、それがどういうことを意味するものかを感知することすらできないこれらの「学者」連中は、スターリンの所論の正否を見きわめることなど逆立ちしてもかなうものではなく、したがって、手っとりばやくスターリンの文章をそのまま剽窃して並べるだけではまだ足りず、これに輪をかけていっそう荒唐無稽の

修正主義的空文句を連ねるという「自然の成り行き」が支配することになっている。その限度知らずのでまかせぶりをつぎに抜粋してお目につけよう(傍点、ゴシック体、(!!) および(!?) はすべて山本のもの)。

ソ連邦『経済学教科書』(改訂増補第四版)——「第二十六章 社会主義のもとでの商品生産、価値、貨幣」のうちから。

「社会主義のもとで(!!) 商品生産と商品流通(!!) が存在しているかぎり(!!)、価値法則も作用しつづける。

価値法則が、人々を支配する自然力として作用している資本主義とは反対に(!?), 社会主義経済では、価値法則の作用は、経済を計画的に指導する実践のなかで、国家によって認識され(!?), 考慮され(!?), 利用される(!?)」(邦訳、第四分冊、七九二ページ)。

「価値法則は、生産部面においても(!?) 流通部面においても(!?), その作用をあらわす。

社会主義国家は、価格を計画化するにあたって、価値法則の作用を考慮し(!?), これを利用する(!?)。

国家が計画的にさだめる商品価格の基礎には、その価値(!?)がある(!?)。社会主義経済で生産される商品——生産手段(!?)と消費物資は価値をもっており、その大きさは社会的必要労働量によってきまる(!?)。

価値法則は、商品の生産と実現(!?)が社会的必要労働支出にもとづいておこなわれる(!?)ことを必然とする(!?)。商品の価格は、社会的必要労働支出におうじてきめられる。商品の価値を規定する社会的必要労働というカテゴリー(!?)は、技術の進歩を刺激し、生産力を向上させるうえで大きな役割を演ずる(!?)」(前出、七九三ページ)。

「価格を計画化するさい、価値法則の作用を考慮し、利用する必要があるというのは、あらゆる場合に必ず価格が価値と一致(!?)しなければならないということではない。商品の価格は価値の特殊な現象形態(!?)である」(前出、七九五ページ)。

「生産部面における価値法則の作用は、価値と価値形態(!?)との利用(!?)のうえにたてられている経済計算の制度をとおりてあらわれる」(前出、七九六ページ)。

「価値法則に精通して(!?)これを計画的に利用することは、資本主義にたいして社会主義がもつ非常に大きな長所(!?)である。価値法則に精通しているおかげで(!?), 社会主義経済における価値法則の作用は、資本主義のもとでのように、生産の無

政府状態とむすびついた社会的労働の浪費をとまわらない。

価値法則と、それに結びついた(11)経済学的カテゴリー——貨幣、価格、商業、信用(12)、金融(13)——は、ソ連邦と人民民主主義諸国において、社会主義と共產主義を建設(14)するために、国民経済を計画的に指導する過程でみごとに利用されている(15)。

商品生産や価値法則や貨幣が死滅するのは、共產主義の最高の段階になってからである(16)。(前出、七九七—七九八ページ)。

エヌ・ア・ツァブロフ編『社会主義経済学』——第5部、第3篇、第二十六章「価値法則と価格」から。

「価値法則は商品生産の特有法則である。けれども、生産様式が異なれば(17)、この法則の内容(18)は異なった形態をとり(19)、その本質(20)は異なったあらわれかた(21)をする」(邦訳、上巻、四一七ページ)。

「資本主義のもとでは、価値法則は、資本主義的生産様式の基本的法則である剰余価値法則の作用によってあたえられた範囲内(22)、作用する。

社会主義のもとでは、商品関係と価値法則の現象形態(23)は、商品関係および価値そのものから(24)みちびきだす(25)ことができない(26)。それらは、社会主義の特有法則——基本的経済法則(27)、計画的発展の法則(28)、社会主義的蓄積の法則、等々——が作用することの結果(29)である」(前出、四一八ページ)。

「社会主義的生産諸関係は、商品、貨幣関係と価値法則が機能する新しい諸条件(30)をつくりだす。

価値は、人びとの意志や意識にはかわりなく存在する。しかし価格、すなわち価値の貨幣的表現は意識的作用の結果でありうる(31)。社会的再生産過程にたいする意識的作用(32)は、価値からの乖離がかなりいちじるしくなることを必要とする場合がある。……社会主義のもとでは、国家は商品関係(33)と価格形成過程に積極的に作用する」(前出、四一九ページ)。

「個々の企業は、一定の限界内で、あれこれの経済的要因の作用をうけて、自分が生産する使用価値(34)の範囲(35)を自主的に決定できるから(36)、その限界内では(37)、価値法則は社会的労働の配分に作用する(38)要因としてあらわれる。

企業や買手にとって、価格の大きさは無関心事ではありえない。生産物の価格がその生産に要した企業の貨幣支出額(39)よりもずっと多ければ、その企業はこの製品種目の生産に関心をもってくる。反対に、価格が企業の支出額をカバーするのに不

十分(!!)であれば、企業はその製品の生産を縮小しようとつとめる(!!)。しかし、特定生産物の生産の「利益・不利益」から発する欲求によつて、(!!)自分の生産を再編成しようとする個別企業の志向がどんなにつよく(!!)ても、企業が社会的生産全体の計画的発展の方向を変える(!!)ことはできない。なぜなら、剰余総生産物(!!)の规定的部分(!!)は社会(国家)の手中にあるから(!!)である。

コルホーズ生産の分野では、商品関係(!!)の作用(!!)範囲がより広い(!!)から(!!)、社会的労働の配分にたいする価値法則の作用はずっと大きい(!!)。しかしこの分野でも、全人民的生産形態(!!)が主導的・规定的役割をもっているために(!!)、社会全体の利益と解決しがたい矛盾におちいる(!!)ように生産の方向を変更する(!!)ことはできない」(前出、四一九—四二〇ページ)。

「個々人が社会的生産に支出した労働の社会的承認(!!)は、直接に労働支出を通じても(これは労働に應ずる分配の法則にむすびつく(!!))、一定の生産物を通じても(これは価値法則とむすびつく(!!))、おこなわれる。このことは、あれこれの社会成員が社会的労働と社会的生産への参加を実現する二つの異なった方法である。

労働に應ずる分配の社会主義的原則は、商品生産のもとで存在する価値等価の原則(!!)と同じではない。この相違は、商品生産の場合(!!)には商品生産者が交換する生産物の等価(!!)であるのにたいして、社会主義の場合には労働の量の等価(!!)であるという点にある。

しかし、社会主義の場合には、労働に應ずる分配の原則と価値法則とのあいだに一定の結びつき(!!)が存在する。それだけでなく、さまざまな種類の労働のあいだにかなり大きな差異がある(!!)条件のもとでは、労働に應ずる分配原則を実現するためには、生産物の運動(!!)の価値的形態(!!)と社会的総生産物における個別生産者の割合(!!)の規定の価値的形態(!!)がやはりまだ不可欠となる」(前出、四二二ページ)。

東独『社会主義経済学——ドイツ民主共和国における理論と実践』——「3 経済諸法則とドイツ民主共和国における社会主義の経済制度」のうちの「社会主義社会における社会的に必要な労働、価値法則および貨幣」から。

「社会主義における商品生産労働(!!)の二重性格は、資本主義におけるそれとは原則的に異なる。資本主義的商品生産における価値形成労働が、搾取関係(!!)を媒介し(!!)、資本主義的取得の体系(!!)における構成部分(!!)であるとすれば、社会主義

における価値形成労働(!!)には、搾取から解放された社会主義的生産者の計画的な社会的取得過程(!?)が表現されている。  
価値形成労働ないし(!?)社会的に必要な労働とその結果(!?)である価値(!!)は社会主義的(!?)商品生産の決定的な範疇(!?)である。社会的に必要な労働は、商品生産のすべての範疇(!?)をつらぬく。原価(!?)、価格、利潤(!?)、国民所得、蓄積、消費(!?)などがそれである」(邦訳、上、二〇四ページ)。

「社会的に必要な労働、価値(!!)は、社会のおよび個人的欲望を充足するために社会主義的生産者(!?)によって生産される物財の交換可能性(!?)を明らかにする。分業により相互に多様に結合している社会主義社会においては、いずれの企業も物財を生産するために、社会的総労働の一部を遂行する。といっても、個々の企業は一切の個別的支出が、社会とその最適な欲望充足(!?)の立場からみて必要な労働支出として受け入れられるわけでは必ずしもない。生産物に対象化されている一般的な無差別な、その具体的な特殊性から捨象された労働、すなわち社会的労働(!?)が、他の抽象的労働と(!?)比例的に交換される(!?)のである。

したがって、社会主義社会は、分業的に編成されている生産単位によって支出された労働を、社会的に等しい労働支出(!?)として相互に関係せしめるのである。そのことによつて、社会主義社会は、総労働のいずれの部分をも(!?)、社会的に必要な労働ないし(!?)価値に制約する(!?)。具体的労働は、具体的労働の生産物である使用価値が実現される(!?)ことによつて、社会的に規定された(!?)抽象的労働に還元される(!?)。価値の量的規定の問題は、このこと(!?)と結びついている。ある商品(!?)の価値量は、社会的総労働の正しい配分が前提されるならば(!?)、社会的に必要な労働時間によつて規定される。『社会的に必要な労働時間とは、現存する社会的に正常な生産諸条件と労働の熟練と強度の社会的平均度とをもつて、なんらかの使用価値をつくりだすために必要とされる労働時間である』。この社会関係(!?)は、個々の企業における生産物の生産にたいして、それを生産するために社会的に必要なだけの労働を支出することを法的に(!?)要求する。企業において支出される労働は、それが社会的に必要な労働の一部として支出される(!?)かぎりにおいてのみ有効である(!?)」(前出、二〇四ページ)。

「価値法則は、交換可能性(!?)、すなわち計画的に生産する社会主義的商品生産者(!?)の社会的諸関係としての商品の経済的質(!?)を規定する(!?)」(前出、二〇六ページ)。

「労働生産物が商品性格を帯びるすべての生産様式(!?)において、価値法則が作用する。もっとも、それぞれの生産様式において、価値法則は、特殊な性格(!?)を帯びるのであるが。あらゆる一般的な(!?)経済的範疇と法則がそうであるように、価値と

價值法則も歴史的に變化する(!!)。この變化(!!)は、價值と價值法則の變容(!!)(一言でいえば價值變容(!!))と名付けられる」(前出、二〇六ページ)。

「社会におけるこうした、いっそう發展した意味での價值法則の意識的利用(!!)は、つぎのことに役立つ。

——社会的に必要な労働支出をたえず引下げ、社会主義企業における需要に適應した生産を經濟的に刺激する(!!)こと。

——最高の經濟的合理性の立場から生産資源を最適に發展させ、利用すること。

——社会的欲望(!?)を最大可能に充足する(!?)ように、社会的労働の比例的配分(!?)を計画的におこなうこと。

——社会的に必要な労働支出(!?)に基づいた国内市場や対外市場での等価的(!?)商品交換」(前出、二〇七ページ)。

いや、尊敬すべき「マルクス經濟学者」紳士諸君、たいへん結構である。なんと、お美事なスターリン所論の剽窃であろうか！ いや、スターリンそのひとなど、とうてい比べものにならないほど、すばらしいマルクス修正ではないか！

マルクスの「社会的必要労働時間」にかんする基本的命題をそっくりそのまま頂戴してこれを「社会主義」社会にあてはめてみせるなど、なんとたいした世紀的ペテンではあるまいか！ だが、修正主義的ペテンに長けた紳士諸君、あれこれ「價值法則の利用」の効果のほどを書きたてるのは、もうたくさんである。それよりもまじめに、ひとつ、價值法則とは、いったい、どういうことなのか、その意味内容を簡單明瞭に説明してみるのがいい。君たちの山ほどある迷論卓説のなかに、價值法則とはどういうことかという、肝腎の本体の説明がすっかりぬけているというのは、いったいどうしたことであるか？

それからもうひとつ、「社会的必要労働支出」とか、「社会的生産に支出した労働」とか、「社会的に必要な労働時間」とかを、紳士諸君の誇るべき「社会主義」国で、どのようにとらえているのか、ひとつよく説明してくれたま

え。たとえば、小麦一トンのうちにふくまれている「社会的必要労働」の量は、何労働時間なのか？そして、その量は、どうやって諸君が計算し得たのか、はつきりと説明してみたまえ。もし諸君が、「社会的必要労働」の量を、したがって「価値」の大きさをちゃんととらえて何労働時間というように示すことができるのでなければ、ただ、口先きだけで、まさにつかみどころのない「社会的必要労働」なるものを百万遍唱えてみたところで、また「価値法則の利用」などという、もっともらしい空文句を百万遍書きちらしたところで、なんの役にも立つものではない。諸君の誇る「社会主義」国、しかも「発達した社会主義」国では計画機関も完備しているようである。だから、小麦一トン、銑鉄一トン、パン十斤、等々、どんなものでも、その中にふくまれている「価値」、つまり、諸君のいう「社会的必要労働」の量は、先刻計算ずみのはずである。ひとつ、はつきりとそれを示してみたまえ！

読者諸君、ごらんのように、これらの公認「マルクス経済学者」にとっては、真理など問題ではない。マルクス・エンゲルスが刻苦してつくりあげさらにレーニンが發展させた、科学としての経済理論を真剣に把握してこれを正しく適用することなど、どうでもよいのである。マルクス・エンゲルスやレーニン・スターリンの用いた「術語」をしこたま並べたてて、現在の体制を、真の社会主義ならぬ、資本主義への変質過程にある括弧つきの「社会主義」国を、いかに巧妙に「合理化」するかということだけが、まさに問題なのである。それゆえ、ここに抜粋してあげた彼らの文章は、そのどれをとってみても、理論的にみても論理的にみても完全に支離滅裂なたわごと、空文句の羅列ばかりである。これこそまさに、修正主義的クレチンの典型のおしゃべりである！

だが、われわれは、これらの修正主義的エビゴーンどもものした労作の内容を、ただ、修正主義的クレチンのぬたくり絵として片づけることはできない。それは、いわば、楯の一面である。われわれは、さらに、そのもうひと

つの面をはっきりと見ておく必要がある。それは、彼らの全く混乱した「理論的」文章の奥に一貫して流れている政治的意図を、つまり、彼らの「社会主義」国の資本主義への変質という客観的過程をいかにマルクスの表現をもって「理論的」に「合理化」しようとしているかという点を、はっきりととらえることである。その意味においては、彼らの一見クレチンの迷文も、なかなかに味のあるものだといわなければならない。われわれは、行論において、彼らの知慧のかぎりをつくした「理論的」文章がごとごとく、厳密にマルクス経済理論の範疇規定を適用してみたとき、右の資本主義への変質過程を明確に裏付けるものとして重要な客観的意義をもつものであることを、検討したいとおもう。まことに、マルクス・レーニン主義をもてあそぶ者は、マルクス・レーニン主義によってうちほろぼされなければならないのである。

（未完）